

児童を対象とした防災教育の効果に関する研究

稲垣 意地子
大石 哲
砂田 憲吾

山梨大学大学院
神戸大学
山梨大学大学院

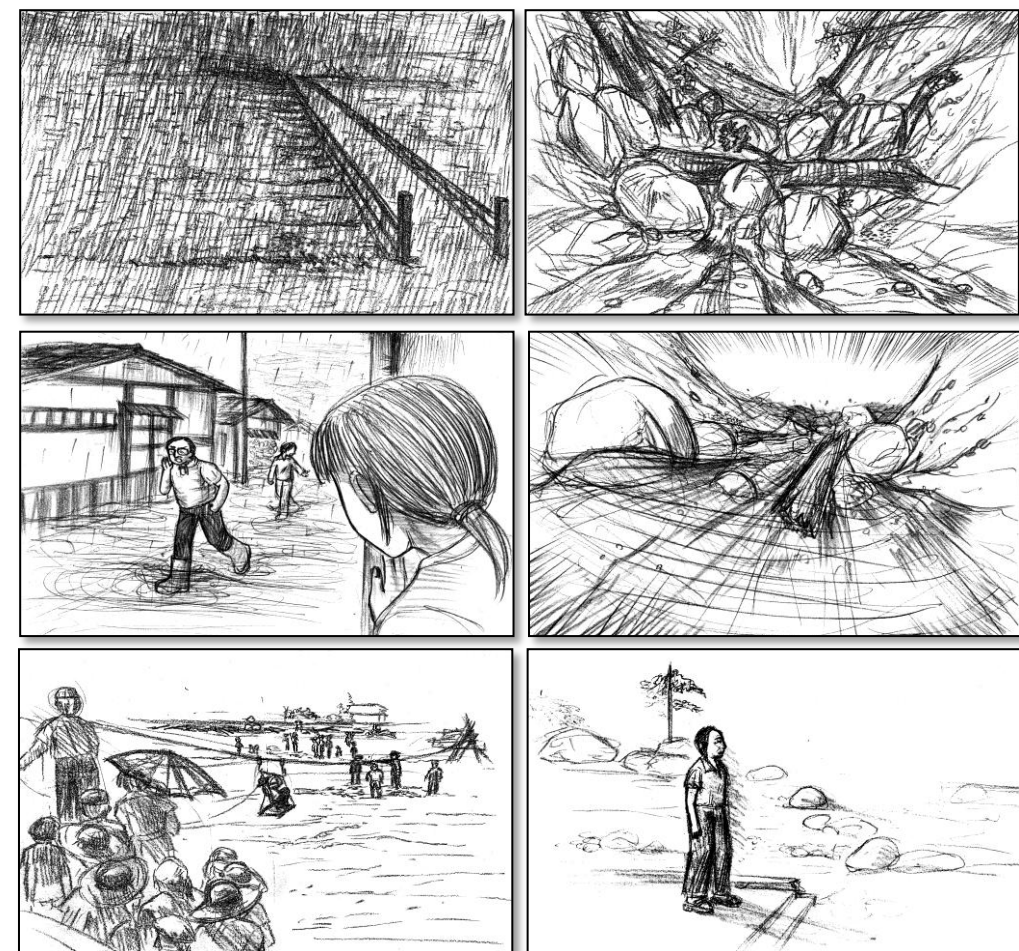
国際流域環境研究センター
都市安全研究センター
国際流域環境研究センター

研究概要

- 児童に対する防災教育は、児童が次世代の担い手であることから、社会的な防災体力をつける上で重要である。
- 昭和34年、山梨県北杜市武川町では、台風の影響によって土砂災害、洪水災害が発生し、多くの被害を被った。本研究では、この災害を題材にして、映像資料を作成した。
- 作成した映像資料を防災教材として、山梨県内の4小学校で視聴してもらい、**児童の記憶や意識の変化**について考察した。

映像資料作成

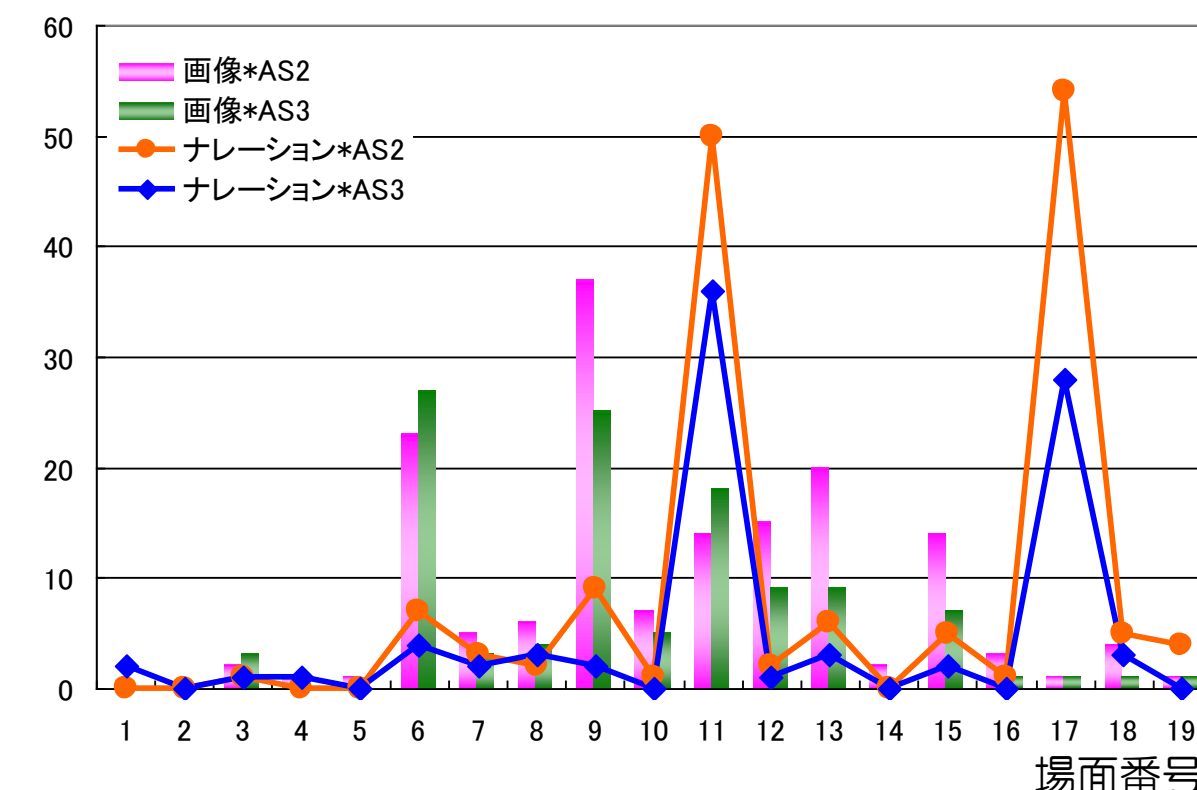
- 映像は当時の資料と被災者の体験談を参考にした。
- モノクロイラスト19枚、ナレーション19パートから構成。
- 7分30秒
- 作成後、昭和34年災害の被災者であり、災害文化保存活動をする方々にも視聴してもらった。



結果

調査1：児童が関心を示した情報

選択した児童数（人）



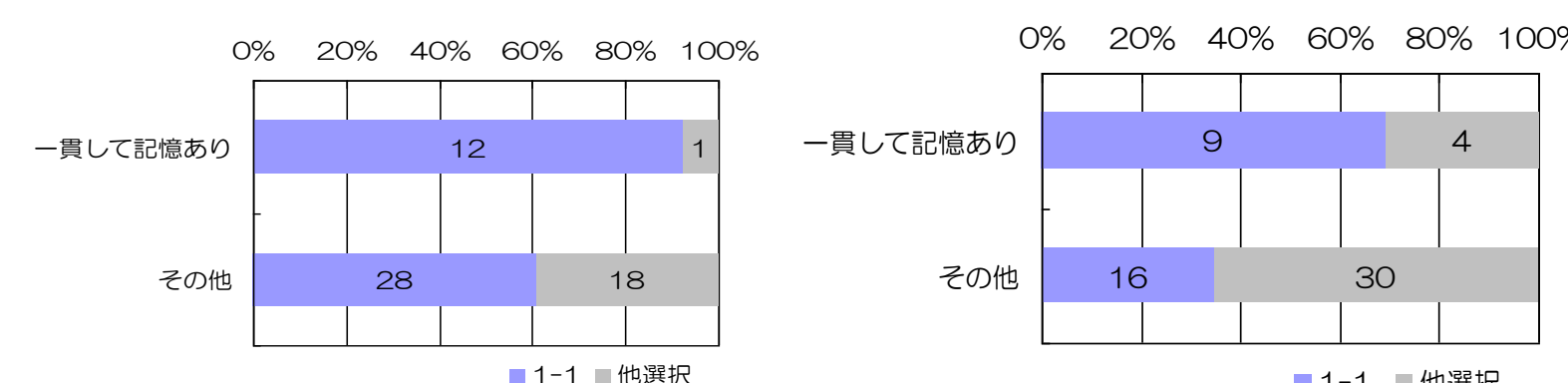
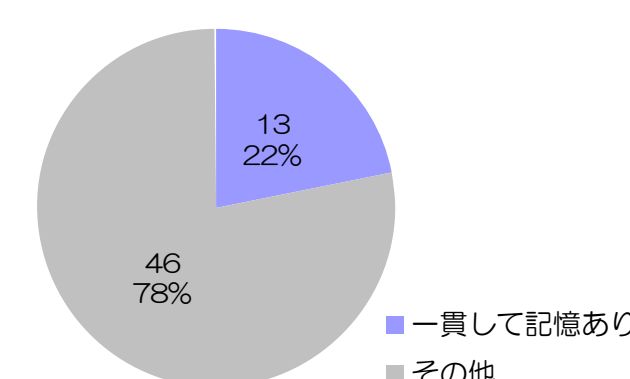
対象：K小学校、S小学校、Y小学校1（実施調査：AS1-AS3）

- イラストについて児童の回答が多かった場面は、土砂災害が発生した場面（6）、せき止められていた水が流れ出す場面（9）、人々が逃げる場面（11）、町の中に水が入り込んでいる場面（12）、町が様相を変えてしまった場面（13）、崩壊した家屋やゴミなどが家に入り込んでいる場面（15）などであった。
- ナレーションについて回答が多かった場面は、人々が逃げる場面（11）の台詞や効果音的な言葉、人々が救助される場面（17）での死者・行方不明者の数であった。

調査2：1年後の児童の記憶と意識

対象：Y小学校1（実施調査：AS1-AS4）

- AS2, AS3で印象に残ったイラスト・ナレーションの回答記述が映像資料内容と一致し、さらにAS4において、映像資料の題材地域名と災害名を記憶していた児童は全体の22%であった。
- 土砂災害に遭遇した場合、どのように感じるかという質問に対して、一貫して記憶を有していた児童のうち、92%は、AS2, AS3ともに積極的に行動する意思を示す選択肢を回答していた。
- 土砂崩れが起こったら、いつ逃げるかという質問では、一貫して記憶を有していた児童のうち、69%が、AS2, AS3ともに自分の意思で積極的に行動する意思を示す選択肢を回答していた。



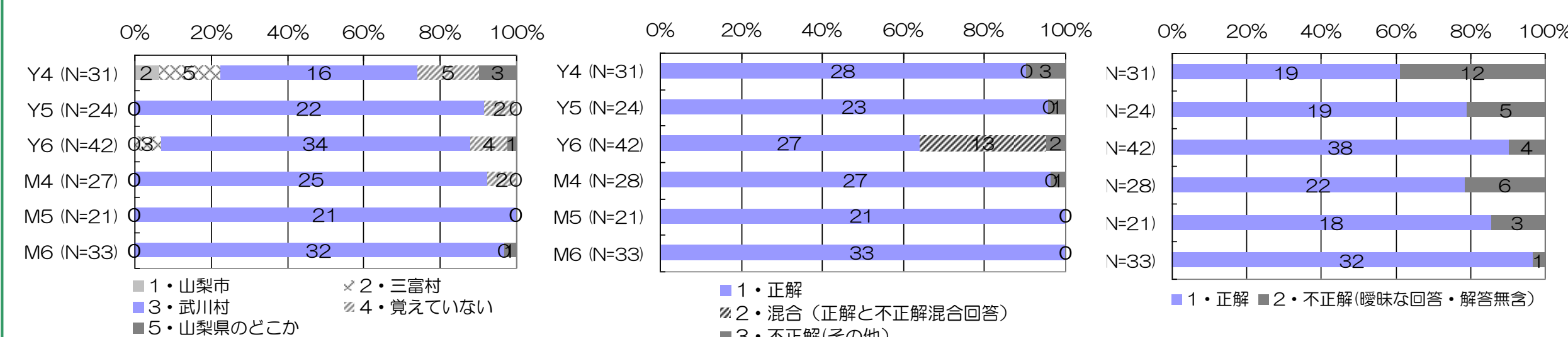
Q. 土砂災害に遭遇した場合の気持ち
選択肢：1. やばい、逃げる！
2. ああ、どうしよう
3. やばい、もう無理だ

1-1…AS2, AS3で、選択肢1を回答したことを示す。

Q. 土砂崩れが起こったらいつ逃げるか
選択肢：
1. 危険を感じたら
2. 土砂崩れが来るのが見えたら
3. 大丈夫かもしれないので家にいる
4. 近所の人が避難したら
5. TVやラジオで避難しろと言われてたら
6. 川の水が減ったら
7. 家の近くに危険が迫ったら

調査3：防災教育に関する背景が異なる児童を比較した場合、記憶や意識の差はあらわれるか

対象：Y小学校2、M小学校（実施調査：AS1-AS3）



- Y小学校2とM小学校の比較では、AS3で質問した映像資料の題材地域名と災害名について、M小学校のほうが覚えていた児童が多い。

Q. どの地域の話だったか

Q. どんな災害の話だったか

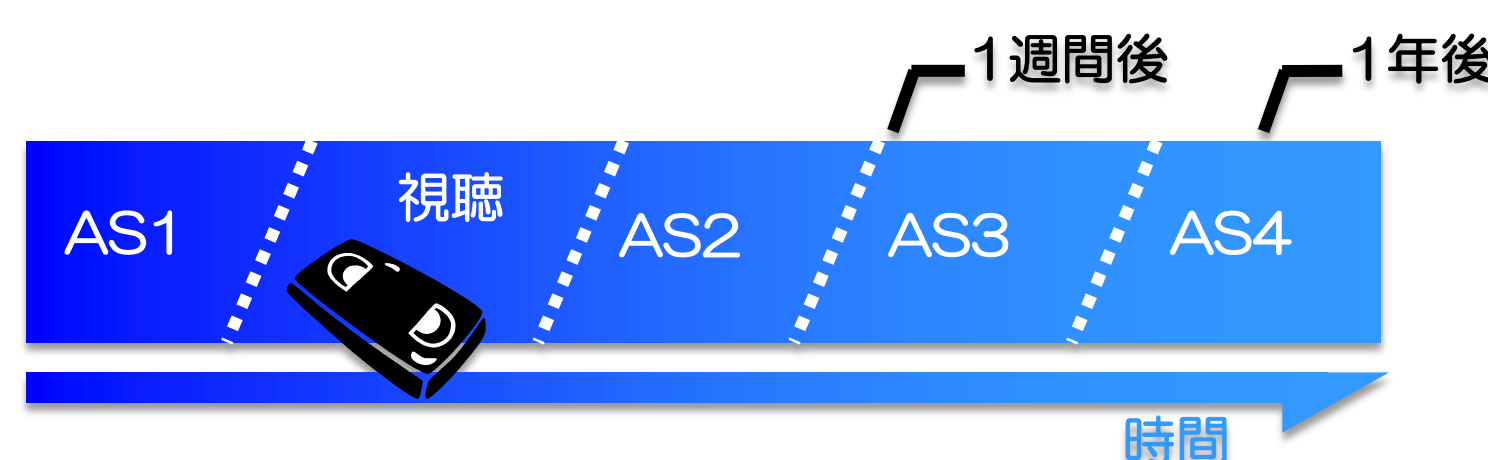
Q. 災害発生予測問題

質問項目	選択肢(AS1-AS2)	小学校比較
Q1. 災害時の避難に対する自己評価 災害時、逃げ切れると思うか (選択肢: 1. 思う、2. 思わない)	1-1(思う→思う) 1-2(思う→思わない) 2-1(思わない→思う) 2-2(思わない→思わない)	M>Y Y≒M Y>M Y≒M
Q2. 災害が起こった時の気持ち (選択肢: 1. 逃げる、2. どうしよう、3. もう無理だ)	1-1(逃げる→逃げる) 1-2(逃げる→どうしよう) 2-1(どうしよう→逃げる) 2-2(どうしよう→どうしよう)	M>Y Y>M Y≒M Y≒M
Q3. 避難合図のタイミングに対する自己の避難行動予測 (選択肢: 1. 合図を待つ、2. 合図を待たない)	1-1(待つ→待つ) 1-2(待つ→待たない) 2-1(待たない→待つ) 2-2(待たない→待たない)	Y≒M Y>M Y≒M Y≒M
Q4. 自己の被災可能性認知 危険な状態の川を見に行か (選択肢: 1. 行く、2. 行かない)	1-1(行く→行く) 1-2(行く→行かない) 2-1(行かない→行く) 2-2(行かない→行かない)	M>Y Y>M Y>M Y≒M

- 映像資料のエピソードと似た状況を想定させ、発生が予測される災害を質問をしたところ、学校間と学年間に差が確認できた。
- 「災害に対する意識」は、M小学校の児童のほうが、Y小学校の児童よりも高かったが、「災害時の防災行動に対する意識」には差は見られなかった。

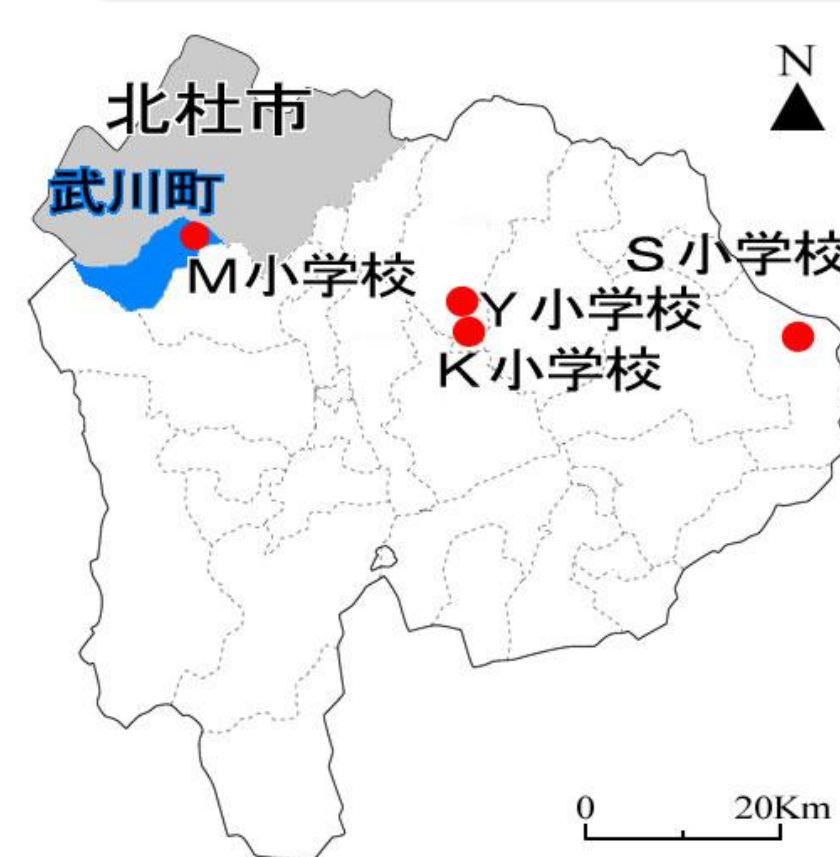
調査の流れ

AS…意識調査



- 調査は、映像資料の視聴前後（AS1, AS2）と1週間後（AS3）、1年後（AS4）に行なった。
- 調査は3種類。
- 児童が関心を示した情報とは？
- 児童の記憶と意識は、1年後どうなるか？
- 防災教育に関する背景が異なる児童を比較した場合、記憶や意識の差は？

児童と武川町



- 対象小学校と武川町の位置関係は左図。
- 児童は4-6年生が対象。
- M小学校は武川町にある小学校であり、児童は昭和34年の災害に関する防災教育を受けている。

小学校	児童数	調査期間	実施調査
K小学校	128	2004.9.24-11.11	AS1-AS3
S小学校	70	2004.9.24-11.11	AS1-AS3
Y小学校1	62 (59)*	2005.10.25- 2007.2.13	AS1-AS4
Y小学校2	82	2008.10.15-12.15	AS1-AS3
M小学校	97	2008.10.15-12.15	AS1-AS3

*AS1-AS3までは62人であったが、転出の関係からAS4では59人に。

ポスターについて

山梨大学大学院 国際流域環境研究センター: <http://www.icre.yamanashi.ac.jp/>
Email: ichikoi@yamanashi.ac.jp

